教材活用例（4）「ジブリ絵職人のアニメ筆」

〔小学校高学年　主題：よりよいものをつくる　内容項目：１の（５）〕

（１）開発資料の実際

ア　素材の説明

（ア）素材の概要

〈素材―西田正美さん―について〉

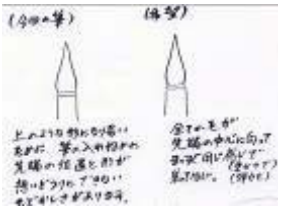
西田正美さんは，熊野町の筆工房の社長さんである。平成 14 年春に男鹿和雄先生（スタジオジブリの美術スタッフ）からアニメーションの背景画を描くための画筆を依頼された。

その日からアニメーションの背景画用筆づくりの試行錯誤の日々が始まった。こだわりの筆は細い線も広い面も描けるオールマイティな筆で，「穂先のまとまり」「適当な弾力」「しなやかな描き心地」「色含みのよさ」「耐久性」等のハイレベルな要望が何度ももたらされた。それらの要望一つ一つに対応し，改良に改良を重ねていった。そして，ついにジブリスタッフに感謝されるアニメ筆ができあがった。

熊野筆の伝統技術を継承・後継者育成・伝統技術の向上していくことの使命感に燃えて，現在も改良を続け，こだわりの筆に向けてよりよいものをつくろうと粘り強く努力している。

（イ）４コマ絵

西田さんやジブリスタッフへのインタビュー，男鹿先生のＦＡＸ等に基づいて場面を整理し，資料構成を検討していった。そして，西田さんの考え方や生き方が表れ，人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし，起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	繊細でハイレベルなアニメーションの背景画を描く男鹿和雄先生（スタジオジブリ）では，使用していた絵筆の品質が低下して，高品質な筆を求めていた。 平成 14 年春，筆をつくってほしいと筆の里工房を通じて西田さんに依頼がある。	西田さんは，プロ中のプロを「うならせたい」とアニメ筆の開発を決意する。 こだわりの筆（こし，しなやかな穂先，形が崩れない，古くなったら平筆に，穂先のまとまり，色含みのよさ，しなやかな描き心地，筆の寿命を伸ばす）を求めて，試行錯誤の日々を過ごす。	「満足するものではない。」というＦＡＸに黙ってたたずむ西田さん。次々とよせられる要望に改良に改良を重ねる。	「感謝しています。」とのＦＡＸ。今ではジブリで使う筆の多くが熊野筆になる。しかし，これからも「こだわりの筆」をつくり続けていく。

イ　資料の解説

【作成の要点】

児童は，スタジオジブリの映画作品はよく知っていて，親しみを感じている。しかし，そんな作品が地元産業の「熊野筆」で描かれていることはあまり知られていない。そこで，熊野町の筆職人の創意工夫や勤勉努力の結晶である「アニメ筆」を教材に取り上げることで，きっと児童の心に響く学習が展開されるであろうと考えられる。

ねらいにかかわる内容項目は，高学年の１の（５）創意進取を取り上げた。アニメ筆をつくる際，「こだわりの筆」を目指して，ああでもないこうでもないと工夫していくところを中心場面にもっていった。よりよいものを創り出すためには，改良に改良を重ねて試行錯誤を繰り返す過程が必要である。そのため「満足するものではない。」と言われ，挫折感を味わいながらもあきらめずにやり遂げていく過程，プロの絵職人と筆職人とのプライドをかけた戦いの過程を表すようにした。また，よりよいものを創り出す喜びが感じられる資料となるよう工夫した。

児童の発達の段階を考えたとき，中学年では１の（２）勤勉努力を取り上げることも可能である。その際には，筆職人が困難に遭いながらも，やろうと決めたことをあきらめず粘り強くやり遂げるところを中心場面としたい。高学年では１の（５）創意進取で扱う場合も，１の（２）勤勉努力は，大いに含まれる道徳的価値であるので，高学年においても１の（２）勤勉努力で扱うことは可能である。中学年の内容項目の「自分でやろうと決めたことは，粘り強くやり遂げる。」に対して，高学年は「より高い目標を立て，希望と勇気をもってくじけないで努力する。」となっており，中学年から高学年への発展を考慮する必要はあるが，資料を平易な文章にしたり，体験活動を関連させたりして学習することによって，どちらの学年でも扱うことが可能であると考える。

当然ながら，これまでの学習によって児童の反応は大いに違ってくる。どの学年で一番心に響くのか，教科や領域等との関連も考える必要がある。中学年の社会科で，町の人々の仕事や伝統工業を学習したり，総合的な学習の時間では「筆まつり」や「熊野筆」を学習したりするなど，学年や学校によっていろいろな関連が考えられる。また，熊野町では，伝統工芸士による「筆づくり」体験をしているので，その体験と関連を図ることもできる。高学年では，そうした体験が生かされるよう考慮し，総合単元的に教科領域と有機的な関連を図って展開できるように資料作成した。

ウ　資料全文

「ジブリ絵職人のアニメ筆」

「ハウルの動く城」（平成 16 年）
「ゲド戦記」（平成 18 年）
「崖の上のポニョ」（平成 20 年）
「借りぐらしのアリエッティ」（平成 22 年）

スタジオジブリ映画の魅力の一つに背景画(アニメーションの動かない絵)の美しさがあげられる。それは,見ていてすいこまれそうなほど美しく,みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。しかも一本の映画には千まいをこえるほどの背景画がかかれている。それには，一本の筆で細かい線

から幅のある広い面まで描けるオールマイティな筆が必要だ。よい背景画をかくために，使いやすい筆を使うことはとても大切なことなのだ。実は，ジブリの映画制作では，熊野町で一本一本手作りされた筆も使われている。

２００２年春のこと，熊野町役場のそばにある筆工房の代表である西田さんに連らくが入った。「となりのトトロ」で背景画をかいたジブリ絵職人の男鹿和雄さんが，数年前から質の低下した筆になやみ，スタジオジブリのスタッフと共に新たな筆を探していたのだ。そんな時，熊野町の「筆の里工房」を訪れたことで，熊野町の筆職人が筆をつくることになったのである。日本画筆を製造していた西田さんがその伝統技術を生かして筆の改良品をつくることになった。

その日から，アニメ用筆づくりの試行錯誤[1]の日々が始まった。さっそく，男鹿さんが大切にしていた使い心地のよい筆が見本として送られてきた。求められているのは，穂先のまとまり，適当な弾力，色ふくみのよさ，しなやかな描き心地である。そして，長持ちすることも求められた。西田さんは，

「絵職人をうならせたい。」

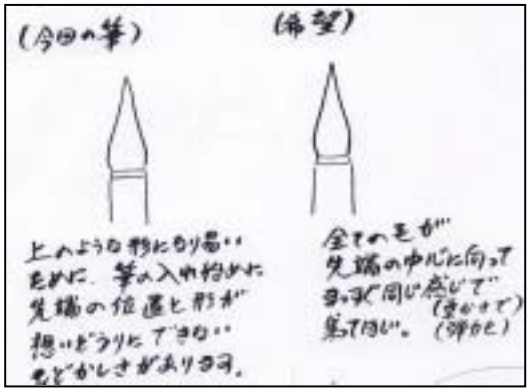
と見本の筆をにぎりしめた。プロ中のプロに満足してもらおうと「こだわりの筆」を求めて挑戦が始まった。

しかし，絵職人の理想の筆はそう簡単に作れるものではない。毛の配分，長さによってとたんにかきづらくなる。原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので，データ通りつくっても次に同じものができるとはかぎらない。よいかき味を求めて，何回も毛の種類の配分をかえては筆づくりにはげんだ。そしてできあがった筆をスタジオジブリに送った。

「使うことはできますが，満足するものではありません。」

男鹿さんらからのファックスの前で西田さんは何も言えなかった。

一年ほどで筆を使ってもらえるようになった。しかし，その後も要望[2]は，ファックスでそして電話で，次から次へと送られてくる。要望にかなう筆がなかなかつくれず，試行錯誤の日々が続いた。



「使い始めは，おっ，今回のは！という感じ。しかし，何日か使っているうちに，穂先が思い通りになってくれ　ないのが気になってきました。」

「イタチの毛の割合をかえてみよう・・・。」

「すべての毛が中心に向かって，まっすぐ集まってほしい。」

「『練りまぜ』をしっかりしてみよう・・・。」

「もっと，弾力や穂先のまとまりがほしい。」

「『選毛・毛組み』をやり直そう。」

西田さんは，要望のたびに，ねばり強くくふうしていった。男鹿さんやジブリスタッフの「こだわりの筆」を求めて大変な思いで改良[3]に改良を重ねていった。

こうしたスタジオジブリとのやりとりにより，一本の筆で細かい線から幅のある面まで描けるオールマイティな筆ができあがった。ジブリスタッフから，
「ここ何年かこちらの要望をもとに試行錯誤をされて，このように使いやすい筆に仕上げていただいて，感謝しております。」
こんなファックスが届いた。今ではスタジオジブリの多くの筆が熊野町でつくられた筆なのである。熊野筆が，スタジオジブリの映画づくりにとって重要な役割を果たしている。そして，他のアニメ会社でも熊野筆は使われるようになった。熊野の伝統技術がアニメ映画の世界にも役立っているのだ。

しかし，ジブリ絵職人と筆職人による妥協(4)をゆるさぬものづくりは終わったわけではない。改良は今もそしてこれからも続いていく。
「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」
と西田さんは，アニメ筆を手に熱い思いで語る。

【注】
(1) 失敗を重ね，だんだんよくしていくこと。
(2) もとめのぞむこと。
(3) あらためてよくすること。
(4) 両方が折れあって，話をつけること。

【参考文献】
男鹿和雄　スタジオジブリ責任編集「男鹿和雄画集Ⅱ」　徳間書店　2005 年

エ　授業展開例　ー学習指導案（略案）ー

よりよいものを求めて工夫する場面に着目し，西田さんの心情について考える展開
～　書く活動を生かした指導　～

（ア）主題名　よりよいものをつくる　１－（５）

（イ）ねらい

西田さんの筆づくりに対する思いに共感することを通して，常によりよいものを求めて創意工夫し，粘り強く取り組もうとする心情を育てる。

（ウ）資料名　「ジブリ絵職人のアニメ筆」

（エ）学習指導過程

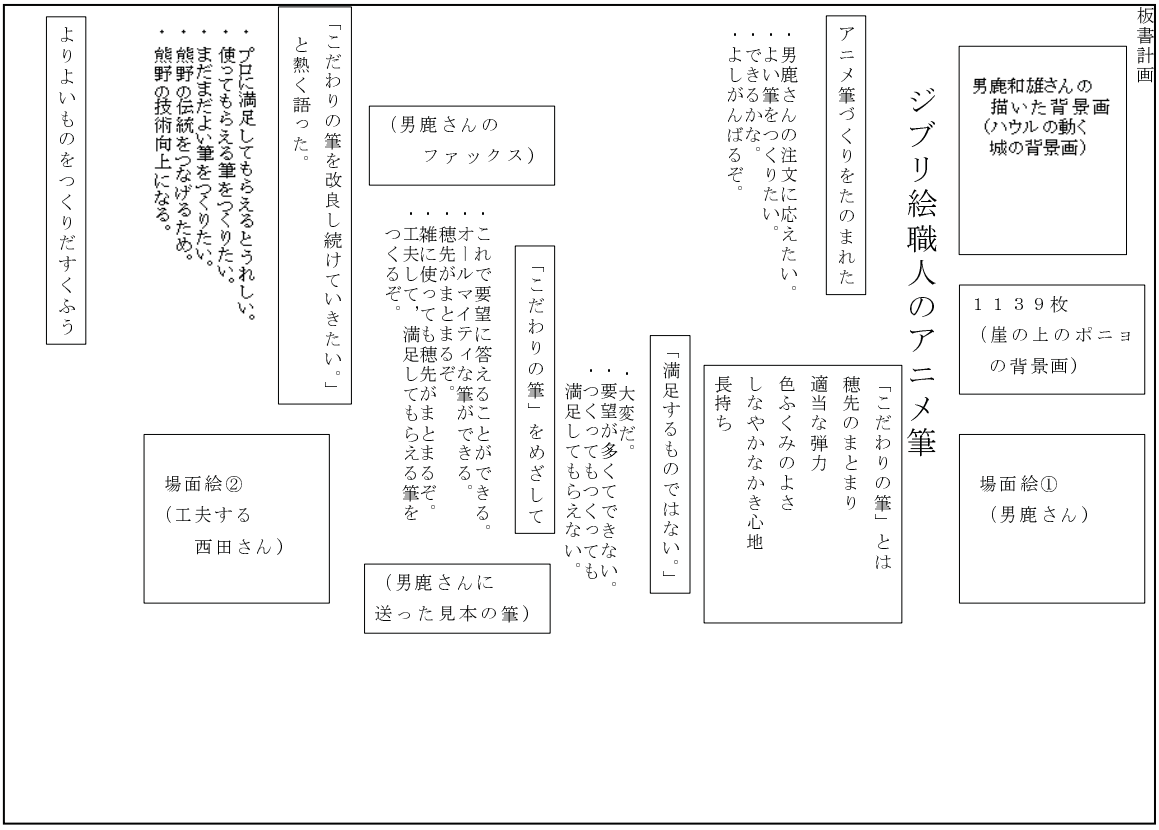
	学　習　活　動	主な発問と児童の心の動き	留　意　点 （☆評価の観点）
導 入	1　背景画を見て感想を出し合う。	○　「借りぐらしのアリエッティ」の背景画を見てどんな感想をもちましたか。 ・こまかい。 ・本物みたい。 ・すごいたくさん描くんだな。 ○　この絵は熊野でつくった筆で描かれているのです。	○　できるだけ大きくして臨場感をもたせる。

展 開	2　資料「ジブリ絵職人のアニメ筆」を読んで話し合う。 ○１場面	 ○　プロ中のプロから「こだわりの筆」を頼まれたとき西田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・男鹿さんの注文に応えたい。 ・よい筆をつくりたい。 ・よしがんばるぞ。	 ○　西田さんのことを知らせてから資料を読む。 ○　「こだわりの筆」とはどういうものか確認する。 ○　試作を依頼された喜び，やる気をおさえる。
	○２場面	○　「満足するものではない。」と言われたとき西田さんはどんな気持ちになったでしょう ・大変だ。 ・せっかくつくったのに。 ・つくってもつくっても満足してもらえない。	○　工夫してつくっても満足してもらえない辛さにも共感させる。
	○３場面	◎　「こだわりの筆」をめざしてどんな気持ちで工夫したのでしょう。 ・これで要望に答えることができる。 ・オールマイティな筆ができる。 ・穂先がまとまるぞ。 ・雑に使っても穂先がまとまるぞ。 ・工夫して，満足してもらえる筆をつくるぞ。	○　ファックスを見せ，臨場感を出す。何度もファックスでやりとりし，大変な作業であったことを実感させる。 ○　「こだわりの筆」をめざして工夫をした時の心情を考えさせる。 ○　ワークシートに書き，自己内対話を促す。時間をとったらペアトークで交流する。 ☆　書く活動を通して，西田さんの筆づくりにかける「こだわり」を自分に引きつけて思考することができたか。
	○４場面	○　熱い思いで語っている西田さんは，どんな思いなのでしょう。 ・プロに満足してもらえるとうれしい。 ・使ってもらえる筆をつくってよかった。 ・まだまだよい筆をつくりたい。 ・熊野の伝統をつなげたい。 ・筆づくりの技術向上になる。	○　理想に近づく筆をつくることができた喜びや熊野の伝統技術を継承したい思いをおさえる。
終 末	3　ビデオメッセージのお話を聞く。	○　西田さんのお話を聞きましょう。	○　メッセージを感じ取る。
	4　自分の思いを振り返る。	○　西田さんの思いを知って，みなさんはどんなことを考えましたか。 ・こだわりのある生き方がすごいな。 ・熊野筆の伝統を生かして，新しいことも考えている。西田さんはすごいな。わたしも頑張りたい。	○　自分がどう考えたかワークシートに書くことで，自分の考えを整理し，一層確かなものにする。

（オ）資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情（西田さん）	児童の意識の流れ
	中心人物（西田さん）	その他の人物（男鹿さん・ジブリスタッフ）		
○ジブリ映画背景画のすばらしさ ○二〇〇二年アニメ筆の依頼 ○満足してもらえない ○だんだん要望のレベルが高くなる 改良に改良を重ねる ○感謝されたさらによいものをもとめて改良を続ける	・アニメ筆を依頼される。「絵職人をうならせたい」 ・原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので、データ通りつくっても次に同じものができるとはかぎらない。できた筆を送る。 ・ファックスの前で何も言えない。 ・イタチの毛の割合をかえてみよう。 ・『練りまぜ』をしっかりしよう。 ・『選毛・毛組み』をやり直そう。 ・改良に改良を重ねた。 ・アニメ筆を手に熱く語る。 ・「こだわりの筆」をつくり続けたい。	・スタジオジブリ映画の背景画の美しさは、見ていてすいこまれそうなほど美しく、みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。 ・筆の品質低下に悩み熊野筆の里工房に相談し、西田さんにアニメ筆を依頼。 ・「使うことはできるが満足するものではない」とのファックス ・要望は次々に送られてくる。 ・「感謝しております。」 ・共同開発は続く。	「うならせたい」西田さん ・プロ中のプロに頼まれてうれしい。 ・つくれるか不安。 ・頑張ってつくろう。 何も言えない西田さん ・悲しい。 ・続けられるか。 ・頑張ってつくったのに。 よりよいものを求め ・あきらめずに粘り強く頑張るぞ。 ・職人の意地だ。 ・要望があるからこそいい筆ができる。 ・熊野筆を有名にしたい。 改良を続ける西田さん ・達成感。 ・満足してもらってうれしい。 ・次も頑張るぞ。 ・「こだわりの筆」をつくり続けたい。	○きれいな絵だな。 ○たくさん背景画をかくんだな。 ○熊野筆が使われているんだな。 ○プロ中のプロにたのまれてすごいな。 ○「こだわりの筆」づくりは大変なんだな。 ○せっかくつくったのにショックだな。 ○次々要望があって大変だな。 ○よりよいものをつくり出すのはすごいな。 ○よかった。すごいな。 ○これからもつくり続けるなんてすごいな。 ○自分もよりよいものをつくりだすくふうをしたいな。

（カ）板書例



【板書の構成】

心情の変化をもたらしたポイントになる言葉を短冊で用意し，西田さんの思いがよく分かるように，言葉を整理して板書する。「こだわりの筆」の定義は，よりよいものを創り出す工夫をする原点となるので短冊で押さえておく。

場面絵は黒板右の「男鹿さん（ジブリ絵職人）」と，黒板左の「西田さん（筆職人）」を対峙させるように提示する。また，中心発問では，「男鹿さんのファックス」と「男鹿さんに送った見本の筆」を上下に位置させて提示する。ワークシートを用意し，じっくり考えたものを板書していく。

さらに，起承転結の心情曲線を意識して，板書の高低をつける。落ち込んで挫折しそうになるところは低く，次への意欲をもつところは高く板書する。

（キ）ワークシート

「ふるい絵職人のアニメ筆」ワークシート

年　組	

◎「ふれあいの筆」をみてみんな気持ちを工夫したのでしょうか。

○岡田さんの思いを知って、みなさんはみんなりにどう考えましたか。

（２）活用のポイント

この資料の特性は，身近な地域の人を取り上げているところである。伝統を生かし，新しいものを生み出している人の思いを追体験することにより，見過ごしがちな人々の労苦を理解し，創意工夫し粘り強く取り組もうとする心情を育てたいと願い作成した。児童は物質的に豊かな環境にあり，便利な生活に慣れて育ってきている。自らの課題や困難なことに出会ったとき，創意工夫して積極的に解決していこうとする気持ちが乏しい。そこで授業では，常に課題意識をもち，創意工夫し，粘り強く取り組む生き方の大切さに触れさせたい。西田さんの言葉をキーワードとして取り上げることで共感できると考える。また，中心場面では，じっくり考えさせるために書く活動を取り入れる。展開の中で児童たちの体験したことを取り上げたり西田さんのメッセージを視聴したりすることで，西田さんの生き方により共感できるものと考える。

ア　発問の工夫

展開では，「うならせたい。」「満足するものではない。」「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」等のキーワードに立ち止まって考えていくようにした。中心発問は，「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」という場面に設定し，よりよいものを創るための工夫に気付き，工夫を重ねていった西田さんの思いを考えさせることにより，ねらいに迫っていく。

イ　書く活動を生かす工夫

中心発問では，じっくり考えることができるようにワークシートを準備した。そして，個で考えた後ペアトークで交流することで，他者の思いを知り，ねらいに迫っていく。

ウ　体験活動を生かす工夫

ジブリ映画や男鹿和雄について知っている児童も多いので，それら児童のもつ情報を導入に生かしていく。また，社会科や総合的な学習の時間に学習した「筆づくり」を想起させ，自分に引きつけて考えさせていく。

エ　視聴覚機器の活用

終末に西田さんのビデオメッセージを視聴することで，児童の関心や意欲を高め，ねらいに迫っていく。

（３）授業の実際 －児童生徒の反応を踏まえて－

ア　発問の工夫

資料の起承転結にそって分割提示し，それぞれ発問していった。

第一発問は，プロ中のプロから筆づくりを依頼されたときの意気込みや喜び，やる気などを押さえていった。児童の反応から，「絵職人をうならせたい。」というキーワードで考えさせていくこともよかったのではないかと考える。

第二発問では，試作の筆を送ったものの「満足するものではない。」との返事で落胆する主人公に共感する気持ちを押さえていった。

第三発問が中心発問で，「こだわりの筆」を求めて，あれこれ工夫する時の心情をワークシートに書かせることで，粘り強くよりよいものを創り上げていこうとする心を押さえていった。

第四発問では，満足してもらいながらもまだこだわりの筆をつくろうとする主人公の思いに気付かせることで妥協を許さぬものづくりへの執着を押さえていった。

イ　書く活動を生かす工夫

中心発問（第三発問）は，ワークシートを活用し，じっくり時間をとって考えさせた。次は，児童の反応である。

・絶対に求められている「穂先のまとまり，適当な弾力，色ふくみのよさ，しなやかな描き心地，長持ちする」をもこえるような筆をつくっていく。そして，スタジオジブリのスタッフさん，男鹿先生をうならせたい。そして，自分も満足するような筆をつくりたい。
・次に送る筆が満足できない筆なら，そのまた次に送る筆をがんばればいい。それでもだめなら前に送った筆よりもっとがんばればいい。必ず男鹿先生が満足する筆をつくるまではあきらめないという気持ちでくふうした。
・ぜったいいい筆をつくって男鹿先生をうならせたい。筆の毛をかえたりしていろんなくふうをした。

授業の終末においても書く活動を取り入れた。その感想では，次のような記述が多かった。

・西田さんはアニメ筆のために一生懸命改良して今も続けていると言うことがすごいと思った。わたしも西田さんのようになりたいと思った。
・わたしも西田さんのように何と言われてもくじけず前に進もうと思いました。今日の道徳をやってよかったです。

書く活動を通して，児童は自分に引きつけて考えを深めていくことができた。

ウ　体験活動を生かす工夫

導入では，平成22年７月に公開されたジブリ最新映画『借りぐらしのアリエッティ』の背景画を見て，その緻密さや魅力に触れた。また，平成22年３月から５月には，『男鹿和雄の世界』という展覧会が町内「筆の里工房」で開催されたことを取り上げ，背景画のすばらしさを感じるように，ポスターを提示するなど，児童の関心を高めるよう展開していった。

そのことを踏まえ，展開前段において，自分たちが体験した「筆づくり」を想起することで，「こだわりの筆」をつくることがどれだけむずかしいことなのか共感することができた。

エ　視聴覚機器の活用

資料から離れ，主人公である西田さんのビデオメッセージを視聴した。身近な地域の人の姿は真実味があり，児童の関心や意欲を高めることができた。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

単独で本資料を学習するのではなく，体験活動の後に位置付けたり，総合単元的に学習していくことで一層の効果が期待できると考える。

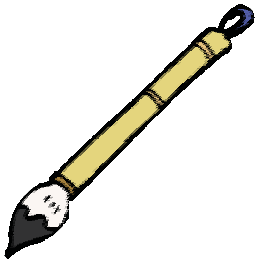
例えば，所属校では，第４学年の各教科等において，熊野筆に関する学習を行っている。総合的な学習の時間には，「わたしたちの町の熊野筆」という単元で，調べ学習をしている。また，第４学年の社会科では「伝とう工業」で熊野筆を学習している。伝統工業がこの地域のどのような特色を生かして続けられているのかを具体的に考えたり，伝統工業のよさについて考えたりして学習しており，10月には，町内の第４学年の全児童が「筆づくり」体験をしている。児童は，町内の十数名の伝統工芸士さんのうち６名の指導のもと，「衣毛まき」を体験し，その後，伝統工芸士さんに『糸締め』『繰り込み』の工程を仕上げてもらい，世界で一つの筆づくりを行っている。

社会見学で熊野町内にある施設「筆の里工房」を見学することもある。そこには，この資料で取り上げた筆の実物が展示されている。

資料を扱う時期としては，体験活動を生かすということを考えたとき，一連の体験を終えた第５学年の時期が効果的であると考える。

中学年で学習する場合には，児童の意識を持続させながら，総合的な学習の時間（熊野の筆祭り）や社会科「町の人々の仕事」（筆づくり）などの学習活動を総合単元的にとらえ，有機的に関連付けると効果的であろう。

（５）心のノートの活用

人は常に「よりよく生きる」ことを求めている。今に甘んじることなくこれまでを反省し，これからを考える力がある。それを行動に移す原動力となるのが創意工夫の心であり，困難なことがあってもあきらめずやり抜こうとする精神である。目標の実現に向けて，創意の心を持ち，努力を続けることは人生を主体的に切り開いていく上で必要なことである。「心のノート（高学年）」PP.28-31 には，「新しいものを求めて」の記述がある。道徳の時間の終末などでここを取り上げるとよいと考える。

また，「心のノート（高学年）」PP.16-19 には，「目標に向かって生きる」，「心のノート（中学年）」PP.16-19 には，「目標をもってやりぬく」とある。１－（２）で資料を展開した場合は，これらのページを関連付けて活用することにより，児童の心に一層響くものになると考える。